

富山県の小学校における

「とやま型学力向上プログラム」への一考察

Considerations of “Toyama's Program for Improving Academic Ability”
in the Prefecture's Elementary Schools

水 上 義 行
MIZUKAMI Yoshiyuki

はじめに

平成20年3月小学校学習指導要領が告示された。冒頭には、戦後60年ぶりに改正された「教育基本法」及び「学校教育法（抄）」が掲げられ、新しい教育理念の基に我が国の小学校教育が始まった。そして、3か年の移行期間を経て平成23年4月より全ての小学校において新しい改訂学習指導要領による教育が始まろうとしている。

今回の改訂学習指導要領で特筆すべきことは、学習内容及び学習時間の増加である。この背景には、我が国の子どもたちの学力低下の問題が内在する。PISA型学力ランキングによると、2000年に世界1位だった数学的リテラシーが2006年に10位、世界2位だった科学的リテラシーが6位、世界8位だった読解力が15位と順位を下げたことが大きな影響を与えている。

このような状況の中で、文部科学省は2007年全国学力・学習状況調査を、小学校6年生と中学校3年生を対象に今日まで継続的に実施してきた。そして、調査結果の全国平均、県別平均を全国の小中学校に公表してきた。

本稿で取り上げる富山県は、2007年小学校6年生国語A（知識・理解）は、正答率83.9で全国5位タイグループ、同国語B（応用・活用）は、正答率66で全国4位タイグループ、算数Aは、正答率85.8で4位タイグループ、算数Bは、正答率66.4で5位タイグループと全国的には上位の学力を示した。しかしながら、2009年は、全て全国平均を上まわっているものの順位は、国語Aで6位、国語Bで11位、算数Aで8位、算数Bで6位と順位を落としている。特に、北陸3県の福井、石川両県よりも正答率が低いことや、2007年に全て富山県の下位にいた石川県に抜かれたことが県内で大きな話題になっている。

本稿では、子どもたちの学力問題において、富山県が力を入れてきた学力向上対策の核となる、「とやま型学力向上プログラム」事業における小学校の実状を取り上げ、その成果と課題を考察し、併せて21世紀を切り拓く心豊かでたくましく生きるための学力の追究を試みる。

1. 富山県における小学校学力向上への取り組み

全国学力テストの結果を待つまでもなく、富山県は全国的に学力上位県として語り継がれてきた。その背景には、昭和24年から61年間の長期研究を積み重ねてきた富山県小学校教育研究会^①の研究成果、平成22年度に56回目の実施を行った同研究会による「学力調査」、昭和43年から「期末テスト」「学期のまとめ」「学習のたしかめ」と名称を変えてきている富山県教育会^②の学力調査、平成22年度で54回を数える同会が主催する「富山県児童生徒思考大会」、平成15年からスタートした富山県小学校長会^③の「チャレンジテスト」などの堅実な取り組みを特筆することができる。

中でも、富山県小学校教育研究会の学力調査は、例年4月の第2週に3学年以上の国語、社会、算数、理科の4科目が実施され、6月上旬には「学力調査結果速報」、7月上旬には「学力調査報告書」が県内全ての小学校に報告される。報告内容は、学力調査結果の得点分布表、学力調査平均点一覧、平均点・中央値・標準偏差一覧、各教科の総合所見、各学年4教科の考察、学力調査集計である。全ての問題を一問一問の分析をしながら、成果と課題を克明に明らかにしている。なお、学力調査に使用する問題の作問や分析は、富山県内の小学校に勤務する各教科の現職教員によってなされている。作問に当たっては、それぞれの教科の特性や課題、学力の現状などから様々な試みがなされている。

例えば、平成22年度の「国語科の総合所見」として次のように述べられている。

「この調査は、3年生から6年生の子どもたちの国語科の学力が4月当初において、どの程度定着しているのかを知り、その問題点や特徴をとらえ、今後の学習指導や学習方法の改善に生かすために実施したものである。今年度は、従来のような問題を「一般調査問題」とし、その中の「言葉」の分野に経年比較問題を組み込んだ。また、「重点問題」として『テキストを理解・評価しながら読む力』『テキストに基づいて自分の考えを書く力』等の、活用する力をみる問題を設定した。」(第56回 学力調査報告書 P7 富山県小学校教育研究会)

学力調査への構えや調査結果は、各教科の授業研究の基盤をなすものであり、富山県小学校教育研究会「研究計画作成試案^④」に位置づけられ、日々の授業改善の指針となっている。平成22年度は「自ら学びをつくり、共に学び合う子どもの育成を目指して」の研究主題を、県内全ての教員が共有し、実践を持ち寄って授業の改善を図っている。このことが、今までの富山県の教育の向上に結び付き、子どもたちの学力向上の一翼を担っていると考える。

また、富山県教育委員会は年次毎に「幼・小・中学校教育指導の重点^⑤」を作成し、毎年小中学校で実施する学校訪問研修において周知徹底を図ってきた。また、全国学力・学習状況調査の分析結果を踏まえて、富山県検証改善委員会を組織し、19年度には「とやま型学力向上プログラム」の創造と発展に取り組んできた。このように、富山県における児童・生徒の学力向上に向けては、官民一体となつての取り組みが見られ、大きな成果が上げられてきたのである。

2. 「とやま型学力向上プログラム」とは

富山県教育委員会は、児童生徒の学力向上対策の一環として、2007年に富山県総合教育センター内に学力向上推進チームを編成し、指導教材「豊かな体験パワーアップカード[®]」、課題別ヒント集「授業改善のためのかくし味[®]」を作成した。そして、2008年度に向けて県内に8校の実践研究校を指定し、「とやま型学力向上プログラム」の実践的な研究をスタートさせた。2008年度の富山県『幼・小・中学校教育指導の重点』には、初めて「とやま型学力向上プログラム」が掲げられ、次のように研究の視点が明示された。

体験的な活動、問題解決的な活動の計画的な導入

- ・とやま型学力向上プログラム
- 「学び合い」と「体験」

この研究の視点は2009年度の「幼・小・中学校教育指導の重点」に継続され、2010年度には、次のように重点化されて徹底されることになった。

「とやま型学力向上プログラム」の推進による確かな学力の育成

—学び合いと体験の重視—

- ねらいを明確にした授業の構想
- 書く活動の充実
- 終末における成果の確認

また、「とやま型学力向上プログラム」は、「富山県教育委員会重点施策[®]」の中でも重点事項として位置付けられ、2007年度には、「とやま型学び育成支援事業」として、県内15市町村の学力向上支援要請に対して、「学力調査結果に基づく改善支援」を行うこととした。更に、2008年度には、「学び合い」を通して、「人間関係づくり」と「学力向上」を一体的に進める授業改善、「体験」を通して、「活用する力」等を伸ばす学習サイクルの工夫改善を核として、富山の特色を生かした学力向上プログラムを目指した。

「とやま型学力向上プログラム」は、県内15市町村に実践研究校を指定し、実践研究校の実践を各市町村内の学校で周知徹底させる仕組みであり、確かな学力の育成のため、学力の向上と人間関係づくりを一体的に進める「学び合い」と、実感を伴った理解につながる「体験」を重視した授業改善を図る施策である。学校現場においては、県内15市町村の特色を十分に生かすことのできるプログラムが可能となり、教材開発、学習過程の工夫など市町村単位で地域の実態にあった授業改善が期待できる施策である。

2009年度には、15市町村すべてに実践研究校が15校指定され、それぞれの実践研究校を拠点校として「とやま型学力向上プログラム」の近隣校への普及を図り、同時にプログラムの改善が図られる実践研究事業の推進体制が確立した。このような経緯を経て、2010年度には、県内15市町村の小学校1校、中学校1校計30校に実践研究校を設置し、小学校、中学校の特性に応じた学力向上プログラムの改善が試みられるようになった。

3. 富山県の子どもたちの学力向上への現状と課題

平成2010年度の全国学力調査・学習状況調査の結果を受けて、富山県の学力向上対策チームは、“平成22年度、富山県全国学力・学習状況調査結果第一報”（富山県学力向上推進チーム編集）を報告した。それを要約すると、教科に関する調査から「平均正答率が引き続き全国を上回り、全体として良好であること。基礎的・基本的な知識及び技能について相当数の児童生徒が出題されている学習内容をおおむね理解していること。全国と比べ、ばらつきがやや小さいこと。」また、児童生徒への質問紙からは、富山県の児童生徒は、「自分によいところがある」「人の役に立つ人間になりたいと思う」などの自尊感情が高く、増加傾向にあること。「学校のきまりを守る」などの規範意識が高いこと。「普段、夕食を一緒に食べる」などの家庭でのコミュニケーションが良好であること。地域行事に参加する児童が多いことなどを、富山県の児童生徒の優れている点として上げている。また、課題としては、教科に関する調査からは「主として活用に関する問題では、主として知識に関する問題に比べて平均正答率が低いこと」「記述式問題において、自分の考えを論理的に記述することに課題があること」、児童生徒への質問紙からは、「全国に比べ、テレビゲーム等の時間が多く、家庭学習の時間が少ないことから、児童生徒の家庭における時間の使い方に課題がある」ことを挙げている。このことは、他の調査からも言われてきたことであり、例えば、富山県小学校教育研究会が行った2010年度の第56回学力調査の総合所見を要約すると、いずれも基礎的な知識理解の習得率は高いものの、次のような課題を見ることができる。

国語：自分の考えをまとめて文章に表現したり、文章の構成を考えた上で文章を書いたりする能力。

社会：学習したことをもとに自分の考えを説明したり、社会の動向を足場にして考えたりする能力。様々な資料を目的に応じて効果的に活用しながら考察する問題解決的能力。

算数：基本的な学習内容を習得し、適切に処理する能力。数学的な見方や考え方を活用する能力。自らの考えを絵や図に表現しながら問題を解決する能力。

理科：データから意味を解読したり、段階をおって理解しながら論理的に考えを進めていく能力。学習した内容とくらしの中の現象とを結びつける能力。

全体として、思考判断や資料活用能力などを高めるための授業のあり方、児童生徒の自主的・主体的な学習、家庭における計画的な学習の手立てなどが、学力向上の課題として考えられる。

そのためには、今まで以上に子どもたちの学習意欲を高める授業の展開が求められ、教科・領域の特性を十分把握するとともに、それらの横断的・総合的な授業の展開も工夫されなければならない。

4. 「とやま型学力向上プログラム」の推進

富山県における児童生徒の学力や家庭・社会における生活の状況を踏まえて、富山県教育委員会は、「とやま型学力向上プログラム」の推進による確かな学力の育成を願って「学び合い」と「体験」の二つの提言を行っている。「学び合い」と「体験」は、富山県内15市町村全ての研究実践校（拠点校）に、研究のキーワードとして受け入れられ、研究主題に反映されている。そして、研究の成果は、富山県内全ての199小学校、81中学校に報告・伝達され全県挙げての取り組みが、児童生徒の学力向上の一翼を担っている。

射水市の小学校(15校)では、2009年度に射水市立東明小学校が研究実践校に指定され、研究主題「自ら考え、表現力を高める授業づくり―体験を通して、身に付けた知識及び技能を活用する学習活動の工夫―」を掲げ、「学び合い」を通して、「人間関係づくり」と「学力向上」を一体的に進める授業の工夫を進めた。特に、地域社会や国際交流^⑨(海外小学校との交流)など、地域の特色を生かした体験活動を授業の中に取り入れ、体験を通して身につけた知識・技能を活用した学習活動の工夫を様々な機会を通して発表してきた。11月には、2学年国語「ようすを考えて読もう『お手紙』」、3学年算数「見やすく整理しよう」、6学年総合的な学習「耳をすませば―聞こう東明の声―」を公開し、成果の普及に努めた。研究の成果は、2010年度に射水市立歌の森小学校に受け継がれ、研究主題「学びを楽しむ子どもの育成―書く活動を生かした指導のあり方―」を、研究の視点「実感を伴った理解を目指した“体験”」、「学力向上と人間関係づくりを一体的に進める“学び合い”」を窓口として研究をつないできた。

体験活動は、書く活動に直接かかわり、様々な学び合いの場を提供する基盤であることを授業や家庭での学習を通して明らかにした。児童や保護者へのアンケートを年間4回実施し、それらが学習のマナー、児童の主体的な学びを支える家庭の役割などを低・中・高学年毎に系統的に「家庭学習の手引」として示してきた。これらの成果は11月に、2学年算数「長さをはかろう」、3学年理科「風やゴムのはたらき―風の力を調べよう―」、5学年総合的な学習の時間「すてきがいっぱい歌の森―DVD番組を作ろう―」などの授業と研究発表で公開した。

5. 拠点校(研究実践校)から近隣校への普及

2010年度は、県内15市町村の小・中学校それぞれに研究実践校としての指定がなされ、児童生徒の学力向上対策は県内全域に広がりを見せることとなった。富山県教育委員会は、東西両教育事務所、富山県総合教育センター学力向上推進チームの指導主事、研究主事、等を中心とした支援体制を組み、通常訪問研修、要請訪問研修、公開研究会などにおける指導を試みてきた。学力向上の基盤をなすものは、何といたっても授業の改善であり、授業を展開する教師の資質向上が喫緊の課題でもある。

既に述べてきたように、学力向上のキーワードとして「学び合い」と「体験」を両輪にした取り組みは、特化したような教科に絞っての研究ではなく、全教科・全領域にわたっての授業改善が望まれ学校現場にその周知が徹底されている。

学力向上推進チームの訪問記録「かわら版“あしすと”^⑩」から、22年度の訪問指導で近隣や県内の小中学校に伝えたい内容として、小学校は、国語11授業、算数7授業、社会・理科・道徳各2授業、以下生活、図画工作、体育、家庭、特別活動各1授業、中学校では数学5授業、国語・理科各4授業、社会・道徳各3授業、音楽・英語・特別支援各2授業、以下図画工作、体育、特別活動1授業の中から、授業全般にわたっての改善点が提示されている。

22年度の「かわら版“あしすと”」からは、次のような授業の姿が見えてくる。

「コの字型座席を取り入れた指導」によって、全員で聞き合う場づくりを保障。

「問題解決と内省化を図るノート指導」で、論理的思考の向上。

「3分間のシンキングタイム」で、目的に応じた交流で理解を深める。

- 「体験活動や日常生活経験を生かした学習活動」で、実感を伴った理解。
- 「一人一人がマッチ棒を使った操作活動」で、学習意欲の向上。
- 「学習課題を必ず板書」で、見通しが立ち学習意欲の向上。
- 「付箋を使った相互評価」で、友達のよさを学び合い、学習の成果を実感。
- 「自己選択」で、感じ方を広げ深める学び合い。
- 「例題を大切にしたい指導」で、全員が分かる取り組み。
- 「聞く活動を大切にしたい話し合い活動」で、学び合いの基本を学ぶ。
- 「ラミネートシート」で論理的に説明。
- 「課題の明確化・板書の工夫」で、子どもの理解を助ける。
- 「考えの根拠を大切にしたい授業」で、科学的な思考力を育てる言語活動。
- 「考えを説明、聞いたりする伝え合う場の設定」で、「分かった」「すごい」の感動。
- 「筋道を立てて書く指導」で、条件を明確にした言語活動。
- 「終末にキーワードで説明すること」で、振り返りの工夫。
- 「パソコンを使った学び合い」で、みんなが共有できる場ができる。
- 「付箋を使って自分の考えを整理すること」で、目的や条件を明確にした書く活動。
- 「アドバイスのポイントを明確」にして、見通しをもったペア学習。
- 「考えを話すときのポイント指導」で、筋道を立てて考える力の育成。
- 「ワークシートとノートのドッキング」で、ねらいを絞って書くことの指導。
- 「縦割り活動を生かす」ことで、日常体験を生かした道徳実践力の育成。
- 「目当てと振り返りは裏返し」で、今日は〇〇ができたよと実感。
- 「地図はウソつき？疑問？疑問？」で、実感を伴った理解を体験。
- 「よし、ホットケーキをつくるぞ」で、見通しは、学ぶ意欲の向上。
- 「自分は〇〇と思うんだけど・・・」で、互いの交流しやすい場の工夫。
- 「ペア学習をローテーション」で、聞くことに集中させる工夫。
- 「チーム対抗で四字熟語完成ゲーム」で、耳からも目からも理解できる工夫。
- 「ジグソー学習」で、課題解決学習。
- 「子ども同士をかかわらせる手立ては？」マジックワード。
- 「聞き方、話し方の型を指導」で、発達段階に応じた話し方、聞き方。
- 「握手は何回？」で、生徒の心をキャッチ。
- 「グループ学習を生かした、タグラグビー」で、子ども同士でアドバイスする工夫。
- 「ホワイトボードを使って説明活動」で、互いの考えを聞き合い、伝え合う場。
- 「分からないを大切にしたい指導」で、疑問や悩みを大切にしたい雰囲気づくり。
- 「根拠を叙述に求める一人学習」で、論理的に書く活動の充実。
- 「興味関心を高めるネーミング」で、課題の工夫と学習成果の確認。
- 「短冊を使って文章構成を考える指導」で、筋道を立てて考える力の育成。
- 「ぼくたちの作った課題」で、課題づくりにも学び合いを生かす。
- 「出張ミニレクチャー」で、表現力の向上と質疑応答でより深い理解。
- 「目的意識をもたせる課題の工夫」で、集中力を高める。

「分からないが素直に言える学級経営」で、温かい学級づくりの学び合い。

「電子黒板を活用した学び合い」で、ICT機器の有効活用と授業の改善。

「辞典を活用した国語指導」で、辞典活用の習慣化と確かな学力。

「思考過程をノートで整理」で、論理的に書く力の育成。

「共通体験で学び合う意欲を高める指導」で、互いの意見を聞き合う場の設定。

「よいノートのモデルを示して」、書くことの意欲を高める指導。

このように、授業形態、日常生活への指針、家庭学習、ワーク・ノートなど様々な授業改善に役立つ視点を提示している。日々の確かな授業実践を通して、一人一人の学力向上を目指す努力がなされているのである。このことを、一人一人の教師が自分のものとして受け止める姿がなければ、学力向上を保障する授業改善は期待できない。拠点校から近隣校への普及は、紙媒体、電子媒体、授業公開などで時間と労力をかけて行われており、15市町村それぞれの自然環境、社会環境に合った授業改善を地域あげて取り組むことが、「とやま型学力向上プログラム」という研究体制の意味をなすのである。富山県は、県都富山に、東西南北どこからも一時間程度で集まることのできる地理的強みがある。それが、富山県小学校教育研究会の学力調査の速報及び報告が可能になる要因であり、学力向上推進チームを編成し、県内くまなく訪問指導できる強みである。

6. 「体験」というキーワード

「とやま型学力向上プログラム」のキーワードとして「学び合い」と「体験」が、クローズアップされている。特に、「体験」は、平成元年に新設された「生活科学習」そして、平成10年に新設された「総合的な学習の時間」が様々な提起をしてきたところである。「生活科」産みの親中野重人は、新訂「生活科教育の理論と方法」の中で、「頭だけで学ぶのではなく、体全体で学ぶことの大切さ、体得の重視」を上げる。そして、中野は同書で「伝統的な学校の在り方、すなわち、授業の在り方に变革を求めたということである。よく知っている教師が知らない子どもに教えるのが授業であるという教師主導の授業観の变革である。^⑩」と述べる。「体験活動」を中心に展開していく授業の在り方に一つの指針を与えている。

児童生徒にとって「体験活動」は、新しい知識や技能の習得の場であると共に、既存の知識や技能を応用する場である。時には、繰り返し、繰り返し試みる必要があり、その過程には自分の今まで身につけた全てを生かさなければ解決できないことが多い。20年前、30年前に教えた子どもたちに、小学校時代の思い出の授業を上げさせると、授業で「かまぼこを作った体験^⑪」、「薬草を煎じた体験^⑫」「稲作をした体験^⑬」などが出てくる。しかも、克明に当時の様子を話してくれる。

10数年前に、我が国の最難関大学の法学部に進学した教え子から、次のような便りが届いている。

一前略一思い返してみるに、私に机の上で教科書を開くだけが“勉強”ではないということをお教えくださったのが先生でした。実際に自分の目で見、耳で聞き、仲間とともに考える体験学習を通して、私は学ぶことの面白さを知ったのだと思います。小学生の時には、先生に与えられた教材の中での体験でしたが、自らの判断で物事を選択できるようになってからも、やはり私の

学ぶことの基本は体験にあるような気がします。タイでのボランティア、イスラエルでのキブツ体験、日米学生会議への参加といった活動を通し、私は自らの価値観を知らず、“絶対的”なものとして信じていた自分に気付かされました。—以下略—

子どもたちの言葉に待つまでもなく、「体験活動」を取り入れることによって、子どもたちの記憶に残る授業が成立し、確かな学力を身に付けていく契機となっている。

7. 「体験」と「学び合い」

生活科学習が定着し始めた2000年頃“体験あって学びなし”などと、体験学習への批判が始まり、平成20年版学習指導要領では、体験学習から生まれる“気付き”の重要性が問われるようになり、生活科の目標(1)では、「地域のよさに気付き」、(2)では、「自然の素晴らしさに気付き」、(3)では、「自分のよさや可能性に気付き」と挿入され、改訂のポイントとなった。「体験学習」は、その進め方において全国的な課題の一つとなっている。

「体験活動」は、観察、調査、再現、見学、創作、飼育、奉仕など、体全体を使って対象に働きかける学習方法である。この学習方法は、筆者の38年間の小学校教員の経験から次のような授業改善の視点を見ることができる。

- 1 一人一人が、自らの知識や技能を生かすことにより、新たな知識や技能とともに生きるための知恵を獲得することができる。
- 2 一人一人が、学習活動の経過の中で、自らの課題をもち解決を図ることができる。
- 3 一人一人が、やり遂げた喜び、自らへの自信、感動的な場面との出会いから、学習意欲の向上が期待できる。
- 4 一人一人が、自らのよさや可能性を生かした学習が成立する。
- 5 とかくありがちな、教師の説明的な授業を活性化し、一人一人を生かした授業への展開が期待できる。

「体験活動」を授業に生かすことにより、活動の「記録」「発表」「表現」など、多様な学習活動の展開が期待される。また、「体験活動」の多くは、友達とかかわり合う「学び合い」の場で成立する。「体験活動」への道筋や「体験活動」で体得した知識や技能は、「発表」や「表現」という「学び合い」の場で補充・深化・統合されることにより、確かな学力として定着していく。体験した学習内容が、友達や教師の言葉によって共有され、そこに感情が加わり、授業への集中が高まり新たな発見や知識の習得、友達のよさや学び合うことの楽しさを実感することができる。そしてその成果は、新たな学習への経験として生かされる。このような繰り返しの中から、生きて働く知恵が生まれ、子どもたちの生活を豊かにしていく学力が保障されるのである。

「とやま型学力向上プログラム」が提唱する「体験」は、「体験」と知識・技能の効果的な関連を目指し、「学び合い」は、児童生徒が相互に話し合い、学び合う学習活動を取り入れた授業の確立を目指している。これは、筆者を含め多くの教師たちが長期にわたり挑戦してきた手法であり、学校現場においては永遠の課題でもある。それは、教師の力量、課題の設定、学習内容、子ども一人一人の追究などが授業の成否を左右するためであり、マニュアル化することができないからである。

2010年度も実践研究校を含め、県内の多くの学校では「体験活動」と「学び合い」を中核とした授業がなされている。子どもたちが、調べてきたことや創作したこと、飼育してきた経験などを基盤にして意見を深め合う授業が主流である。

しかしながら、「体験学習」は、十分な準備と子どもたちや地域の実態等に配慮しなければならない。何よりも、教師自身に「体験学習」を進めていく力がなくてはならない。ヘチマの苗とキュウリ苗の区別のつかない教師が、子どもとヘチマ栽培を試みるようでは、授業のねらいに沿った学習は成立しない。称賛を送りたくなる授業、立ち止まって考えさせられる授業、安定している学級経営、不安定な学級経営など授業実践への課題は多い。

8. とやま型学力向上対策が目指すもの

学校現場は、社会の急激な変貌の中で様々な課題を背負い、かつてない経験を余儀なくされている。特に、情報化時代の中で世論の動向は、学校の基盤を揺るがす事態となっている。21世紀が進むにつれてこの傾向はますます大きくなることが予想される。そのような中で、子どもたちの学力問題においては、21世紀を拓く学力とは何かが見えないままに突き進んでいることに危惧を感じる。子どもたちの学力向上は、全国平均を上回ることや順位を押し上げる数値が主目的ではない。学力向上対策は、学力が下がったから上げようというのではない。もともと子どもたちの学力は、向上されなければならないのである。そのためには、学校がなすべき最大の方策は、授業の改善であることは既に述べてきた。小学校は、9科目の教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、外国語活動とそれぞれの教科・領域の特性に基づき授業の工夫が図られなければならない。どの授業も同じような展開は、子どもたちの学習意欲の低下を招き、学力低下の要因となっていく。一時期、基礎基本が劣るという世論の動向を受けて、ドリルの繰り返し、暗記を主とした一斉画一的な授業がマスコミを賑わした。授業は、何かを素早く大量に覚えることではない。ドリルや暗記を繰り返す授業ならば、子どもたちのかかえる多様な問題に答えることは難しい。学力向上を願う授業は、授業を通して教育は何かを考える契機となるのであり、学校のあるべき姿を追究する方策と考えたい。

人間関係づくりと学力向上の一体化を目指す「とやま型学力向上プログラム」は、「生きる力」を育む、新学習指導要領の趣旨に連動する富山方式の手法である。それは、学力の向上を特定の教科に特化するのではなく、全教科・全領域の授業改善を目指していることから明らかである。2007年度から2010年度へと実践的な研究が進み、近隣校を始めとする県内全ての学校で成果の共有を図るため、様々な情報が各学校に発信されている。

本来授業研究は、一人一人の教師によってなされるべきである。しかしながら、学校は、ベテラン教師、若手教師、男性・女性教師、専門領域の違いを生かした集団によって形成されている。十分に自立できない未熟な教師が存在するのも事実である。また、一人の担任で、全ての授業を受け持つ小学校では、他からの効果的な刺激が必要である。子どもたちの学力向上には、それぞれがもち合わせている能力の結集が必要であり、一人一人の能力を組織に埋没させることなく、組織的な取り組みの中で授業改善に努めることがより高い効果を上げることになる。

「とやま型学力プログラム」は、広い意味で富山県全体の組織力であり、実践研究校を抱える

15市町村の組織力でもある。

おわりに

授業は、教師の専門的な営みである。子どもや地域の実態を熟知した教師でなければ不可能な営みと考えたい。誰もが法則的に簡単に展開できるほど甘くはない。しかしながら、教師の授業改善への努力がなければ、子どもたちからの信頼を得ることはできない。教師と子どもたちが、最も多く関わる時間が授業である。授業は、学級崩壊・いじめ・不登校など、学級経営や生徒指導などのかかえる様々な問題解決の手段でもある。一人一人の教師の授業改善への試みが、子どもを健全に導き、学校を活性化していくことに結びつく。

「とやま型学力向上プログラム」は、授業改善のためのかくし味として「友達に伝えたい！わたしの意見」（低学年）、「予想をみんなで話し合い・・・一人でじっくり追究」（中学年）、「考えを深めるために！コース別学習での話し合い」（高学年）など、学力向上を高める授業のポイントを「学び合い編」「体験編」に分類して、それぞれ20項目を県内199校の小学校へ提示している。これらが各学校で活用されていることを望みたい。そして、各学校が子どもや地域の実態に応じた、効果的な独自の「学力向上プログラム」を目指すことを提言したい。

引用・参考文献・注釈

- 1) 平成24年4月発足、富山県内全ての教員が加盟する県内最大の教育研究会 平成22年度会員3470名。
- 2) 明治21年10月発足、富山県の「教育の充実」と「振興」を目的とする会。
- 3) 昭和23年発足、富山県公立小学校全てが加盟する。平成22年度会員数199名。
- 4) 全教科、全領域、特別支援、保健部会の年次研究計画。
- 5) 富山県教育委員会が発行する幼・小・中の教育指導の指針。
- 6) にこにこ（中学年）、いきいき（高学年）、きときと（中学校）コースに編集された学習方法カード。
- 7) 「学び合い編」「体験編」に分けて、小学校低・中・高学年・中学校へと系統的に授業を展開するヒント集。
- 8) 富山県教育委員会の学校教育、生涯教育、伝統・文化、スポーツなど教育全般にわたる重点施策。
- 9) 北アイルランド バリークレア小学校。
- 10) 平成22年12月15日現在、8号発行。
- 11) 新訂「生活科教育の理論と方法」まえがき, pp1-2
- 12) 水上義行「カマボコ」づくりに挑戦 明治図書教材開発6月号, pp50-53 (1991)
- 13) 水上義行「呉羽山は知っている」 富山大学附属小学校, pp97-99 (1986)
- 14) 水上義行「生活科へのチャレンジ」古今書院, pp133-181 (1990)